4. 大興善寺にみる歴史的風致

(1) はじめに

大興善寺を核として、2つの要素から歴史的な佇まいを見ることができる。

1つ目の要素は、昭和53年(1978)に町の木に、昭和62年(1987)に町の花に指定されたつつじである。つつじは、万葉集に収録された和歌にも題材として使われ、咲き誇るつつじの花に詠人の思いをのせて様々な場面で歌われており、日本古来の植物として知られている。大興善寺において大正期から始められたつつじの植栽活動が定着し、やがて当寺は「つつじ寺」として称されるようになり、町内外から多くの人々が訪れるようになっている。さらに、町内の公共施設はもとよりJR基山駅、町内の工場、住宅内の各所でもつつじが咲き誇るようになり、つつじが町全体の初夏を彩るまでになった。

2つ目の要素は、大興善寺の背後に聳える「契山」の命名の由来について、本町で代々語り継がれてきた、瓊瓊杵尊と木花咲耶姫の伝説である「契山伝説」である。大興善寺内にある熊野神社や寺周辺の小松集落では、この契山伝説にまつわる氏神様を親しみを込めて「ゴンゲンサン」と呼び、信仰活動を継承している。

(2) 大興善寺にみる歴史的風致

大興善寺にみる歴史的風致は、下表のように示される。

		建造物と町並み	営み
大興善寺にみる歴史的風致	1) 大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致	●大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み ・大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる建造物 （大興善寺　等） ・大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる町並み	●大興善寺つつじまつり
	2) 契山伝説にみる歴史的風致	●契山伝説にみる歴史的風致に関わる建造物と町並み ・契山伝説にみる歴史的風致に関わる建造物 （熊野神社　等） ・契山伝説にみる歴史的風致に関わる町並み	●契山伝説に関わる神社で行われる信仰活動 ●契山伝説を伝える活動

1) 大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致

❶大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み

ア) 大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる建造物

【大興善寺】

大興善寺は、奈良時代の養老元年(717)に僧行基が草庵を起こし、一刀三礼にて十一面観世音菩薩を彫り安置されたことから開山したとされる。その後、承和元年(834)に大火に遭うも本尊である十一面観世音菩薩像は焼けずに立っていたことから、「火除けの仏様」として広く知られるようになったと『小松山霊地帳』に記してある。承和14年(847)に慈覚大師円仁により再興され、寺名を「大興善寺」と命名して比叡山延暦寺の末寺とし、昭和53年(1978)には九州で最初の天台宗別格本山となっている。

大興善寺は、小松集落の中央に伸びる参道の最奥部に長く傾斜のある石段があり、その最上部に19世紀末頃建築の仁王門が聳えたっている。内部には、両側に仁王が立ち、参拝者の姿を睨んでいるよ

うである。この仁王門をくぐると正面に明治時代に境内にあった護摩堂を背後に移築して一体化された茅葺き屋根の本堂があり、本堂前に置かれた大香炉から立ち昇る線香の香り漂う中、参拝者は手を合わせ祈る。

写真　大興善寺の石段

写真　大興善寺の本堂

写真　大興善寺の仁王門

【つつじ園】

大興善寺のつつじ園は、大正９年(1920)３月19日に住職として任についた神原玄祐師の発起によって始められたとされている。『元禄絵図』にも描かれている大興善寺は、明治・大正において廃れたと伝えられ、神原師は、寂れた荒寺を復興する一助として、「古刹をして現世の浄土にする（『神原玄祐回顧録』）」思いから全山をつつじ園に成すことを思い復興にあたられた。様々の苦難の末、大興善寺が座す小松集落の人々によって、つつじの株が持ち寄られ、神原師とともに地域の人々によって大切に育てられ、その後「つつじ園」として開園した。昭和14年(1939)の商工会記録に、町内の観光名所・旧跡を巡る観光ルートの一つに上げられた記録や、昭和26年(1951)の新聞には当時の様子が掲載されている。

神原師と小松集落の信徒の人々が取り組まれたつつじ園の育成は、今では「古刹をして浄土にする」との願いを体現するかのように、満開の時は、その美しさが訪れた人々を魅了している。その後も本堂背後の丘陵斜面を開墾し、つつじ寺・大興善寺として初夏の彩りを本町に添えることとなった。

写真　つつじ園入口

写真　つつじ園内の様子

【庚申尊天・村雲橋】

細長い自然石表面に「庚申尊天」と線刻され、旅人の道標として機能している。

村雲橋は、その庚申尊天に近接して架かっている。寺参道にある龍水川に架橋された大正元年（1912）改修の石製の橋で、「唐の青龍寺炎上の時、天より降りたまふ悪火消滅の水の符を移し、帰朝の後国家安全のために小松山へ納め置き、毎年二季の彼岸にこの村雲橋にて開眼し給ふ」と昭和5年（1930）に発行された小松の大興善寺誌にあるように、祈願が行われている。

写真　参道沿いに建つ庚申尊天碑

写真　村雲橋

【「つつじ寺」石柱】

大興善寺へ県道と参道が分かれる分岐点に、「つつじ寺」と線刻された石柱が建っている。この石碑は昭和32年(1957)に久留米ロータリークラブから寄贈されたもので、大興善寺がつつじ寺として定着するきっかけとなるとともに、つつじまつり以外の季節に「つつじ寺」がある本町を多くの人々に伝えている。

写真　「つつじ寺」石柱（昭和32年(1957)）

イ）大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる町並み

春の若葉が萌える季節になると、小高い山につつじの道が出来るのが、遠くからでも見ることができる。その山にあるのが、「つつじ寺」の愛称で呼ばれる大興善寺である。寺を見上げるように参道が集落の真ん中に延び、その脇に小松集落の家々がつつましく広がる。

写真　大興善寺がある小松の佇まい

大興善寺がある小松集落は、脊振山系が筑紫平野に張り出す谷合にあり、段々につくられた田んぼと農家住宅に形づくられた農村景観を保っている。JR基山駅から田園風景の中を約4km西北に進むと、山への傾斜の始まり口に、この小松集落がある。県道からの入り口に秋光川が、また集落内には小さな川が縦横に走り、清い水が豊かに流れ、その水音と家々の手入れの行き届いた花々が、訪れる人々に心地よい。参道沿いには旧道を示す庚申尊天の碑や石橋である村雲橋が架かり、最奥部に両側につつじの花咲き誇る長い石段が聳えている。その上部に江戸時代中期建築とされる仁王門が建ち、境内の斜面に咲き誇るつつじの姿に「古刹をして現世の浄土にする。」とされた神原玄祐師の意思を体感することができる。

小松集落の38軒は、「勝負谷(しょうぶだん)組」「東組」「中組」「西谷(にしだん)組」の4組に分かれ、総代・会計の他、各組に小頭が置かれるというお世話人組織があるのは、本町でもここだけの制度である。大興善寺の檀家は4～5軒だけであるが、全軒が信徒(ここでは、協力要請があるとかけつけるという意味)で、寺の存続を助けている。

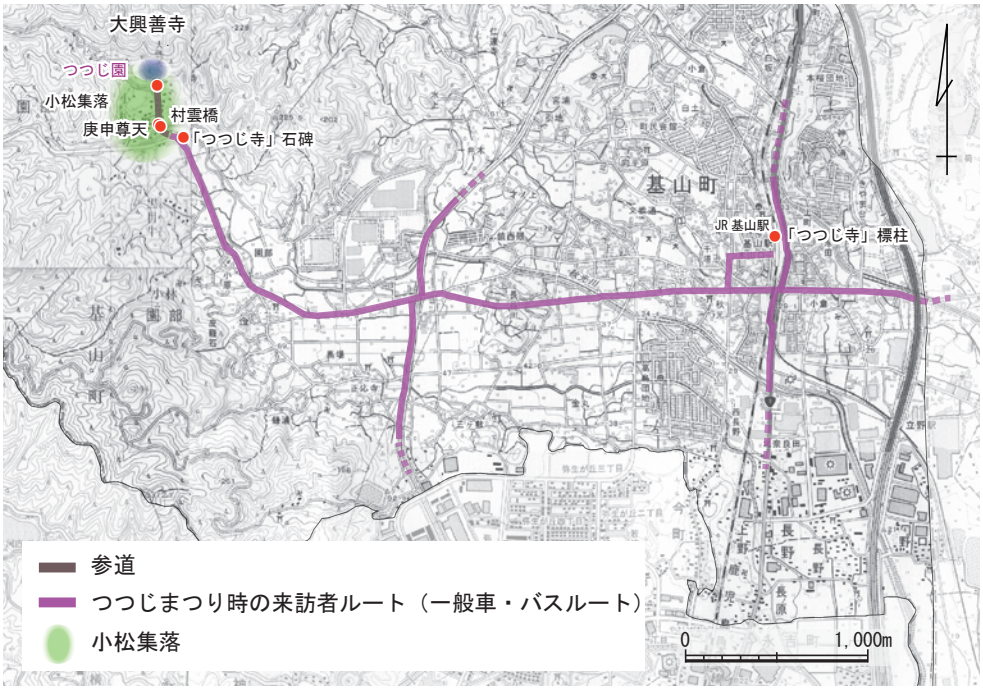


図　大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致に関わる文化遺産

❷大興善寺つつじまつり

本町では、春を彩る桜が散り、初夏をつげるレンゲ草の小さな紫色の花が田んぼを埋める頃、園部の大興善寺のつつじまつりが始まる。つつじまつりは、毎年春４月の中旬から５月の連休までの２週間の短い期間に行われ、このわずかな期間に町内外から多くの人々が訪れている。

大興善寺のつつじまつりは、昭和14年(1939)の国鉄時報や木山口商工会の記録に見え、例年多くの人々が訪れ、昭和26年(1951)の商工会記録にみえる入園料記録では、つつじまつり期間中の15日間で7,317人の人々が訪れている。また、つつじまつりには、遠くは福岡や佐賀、熊本からも訪れていた。現在も毎年３万人もの人々がつつじまつりに訪れている。

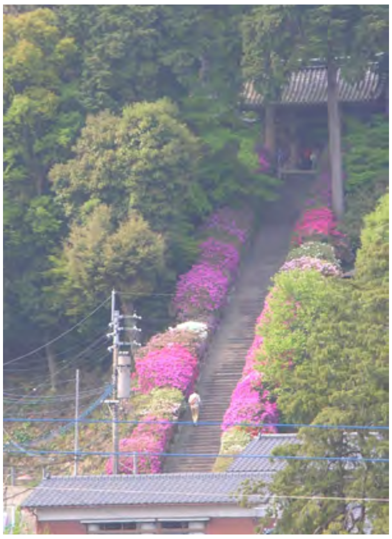
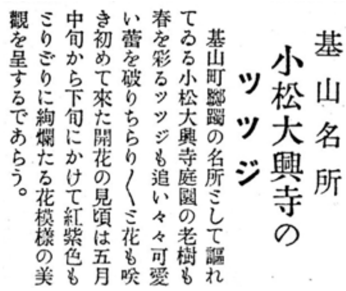


写真　つつじの季節の大興善寺



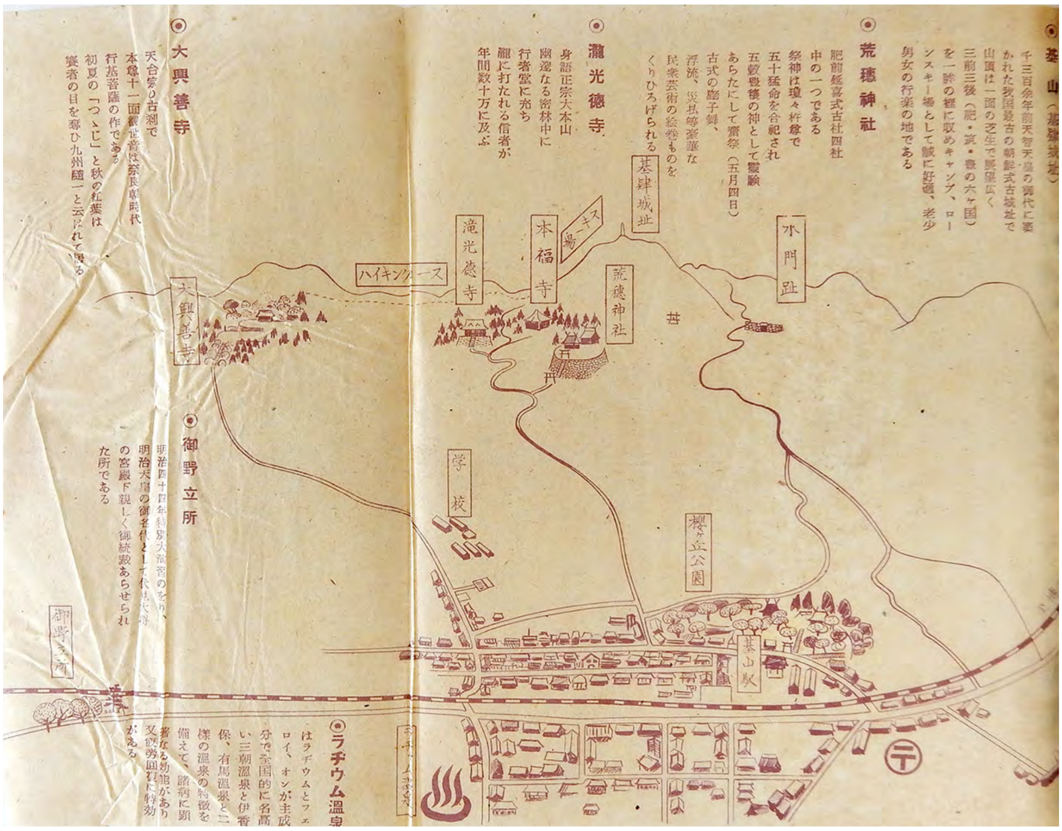
基山名所

小松大興寺のツツジ

基山町鄙蹶の名所として謳れてゐる小松大興寺庭園の老樹も春を彩るツツジも追い々々可愛い蕾を破りちらりくと花も咲き初めて來た開花の見頃は五月中旬から下旬にかけて紅紫色もこりごりに絢爛たる花模様の美観を呈するであらう。

資料　『国鉄時報』臨時版
昭和14年(1939)

資料　つつじ園開園記事(昭和26年（1951）)



資料　木山口商工会による観光地図(昭和28年（1953）)

毎年5月の連休には、JR基山駅前から臨時バスも出て、町内外から多くの花見客が訪れている。基山町内の人々も、家族や友人と、あるいは行政区ごとに花見に訪れる。今では自家用車で訪れる人々が多くなったが、かつては鉄道を使い多くの人々がつつじ祭りに訪れている。今でもJR基山駅ホームには、昭和40年代後半に建てられ昭和61年（1986）に更新された大興善寺の別称である「つつじ寺」を記す立て看板があり、鉄道を利用して訪れた方々を迎える。基山駅西口へ出ると、満開のつつじに彩られた駅前広場が、つつじ寺のある基山を来訪者の心に刻み込む。つつじに彩られる駅前広場の北側には、つつじ祭り臨時バス発着所が設けられ、つつじまつり会場である大興善寺へ人びとを誘導する。臨時バスの歴史は長く、太平洋戦争直後は駐留米軍払下げのボンネットバスを活用して運行され、その後民間会社による臨時バスが走っている。その頃（昭和27年（1952））の時刻表から、午前9時30分から午後6時30分まで1時間ごとのバスが運行され、戦後の混乱期とはいえ、その盛況ぶりを知ることができる。

写真　JR基山駅構内にある「つつじ寺」標柱

写真　JR基山駅前のつつじ

臨時バスに乗り込み大興善寺へ導かれる道沿いには、つつじが植えられ、つつじ寺への期待が自ずと膨らんでいく。このつつじも沿道の住民によって手入れがなされ、つつじを愛でる来訪者へのおもてなしの表現として毎年手入れが行われている。

基山町市街地を後にし、つつじ咲き誇る沿道の植栽を見つつ、植栽のむこうにはレンゲ草の紫に彩られた田んぼが広がり、その中を大興善寺へとバスは進む。ほどなく、大興善寺臨時バス降車場と県道を分かつ分岐に到着する。ここには、大興善寺が「つつじ寺」として定着するきっかけともなった、昭和32年（1957）寄贈の「つつじ寺」と記された石碑があり、つつじ寺大興善寺へ到着したことを印象づける。

今がつゝじの見頃 お歸えりには
小松行バス　5月11日迄
基山（法泉寺）ウラヂ温泉で お休み下さい
特効 神経痛 リウマチ 痛風 疲労回復 によくきゝます
九州随一の（ラヂウム含有量四・九五マッヘ）
基山ラヂウム温泉御案内
九州大学理学部教授 松浦博士 推奨
基山駅より徒歩七分 バス停留所より五分
基山驛列車發着表
小松行バス發着表
御入浴の方々へ
後援×基山町観光協會・基山町商工會
資料　臨時バス時刻表　昭和27年(1952)

写真　つつじに彩られる道を走る臨時バス（現代）

臨時バス降車場には、土産物としてのつつじも売られ、大興善寺つつじ園の花見を済ませた人々が買い求めている。

参詣道には出店も軒を並べ、大正元年（1912）に架橋された石橋・村雲橋を渡り、賑わいを増す参詣道を上り、仁王門（におうもん）前の長い石段を息を切らせつつ上っていく。

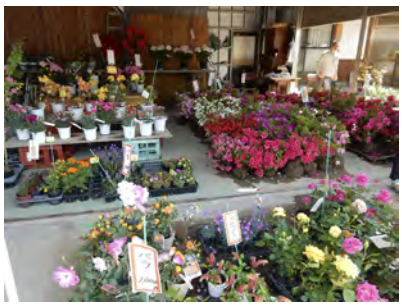


写真　つつじ土産物店

写真　庚申尊天碑と参道

写真　賑わう参道

長い石段の両脇にはつつじが満開に咲き誇り、さも極楽浄土へ導く階段のごとく、つつじの花々に彩られた中を登るかのように錯覚する。

この石段を登りつめると、上に建つ江戸中期建築とされる仁王門をくぐり、正面に明治時代に境内にあった護摩堂(建築年不詳)を背後に移築し、一体化された茅葺き屋根の本堂が見える。多くの人々は、お参りをすませ、本堂の後ろに広がる「つつじ園」へと歩みを進める。本堂の左手には、石製塔婆が置かれており、その中には鎌倉時代まで遡る五輪塔も見受けられ、大興善寺の歴史の深さを知ることができる。

写真　JR九州ウォーキング（大興善寺前）

写真　つつじ満開の階段

写真　仁王門

つつじ園の中には、花見客のための小屋が建てられ、満開のつつじを愛でながら花見の宴が催される。

毎年5月に行われる行政区ごとの火除け行事の折には、この花見小屋を会場とし、花見が催される。今では仕出し屋からの弁当が主流となってきているが、各家庭からの自慢の総菜の持ち寄りは続いており、筍(たけのこ)やつくしなどの季節の旬の総菜を楽しめる場ともなっている。小屋の窓の外に広がるつつじの花を愛でながら、男性たちは酒を酌み交わし、女性たちはつきない話に時が過ぎゆくのも忘れてしまう。区内で寄り合う機会が少なくなっていく中、この花見行事は区民が集い一年の無事を確認する貴重な時間となってきている。

時も過ぎ、区の花見行事で参集した人々は三々五々散会し、赤ら顔で千鳥足の男性たちや笑顔で話し尽きることない女性たちが臨時バスに乗り帰路に就くのは、午後3時頃である。

大正12年（1923）頃からはじまった大興善寺のつつじ栽培は、「つつじ園」へと広がり、町全体がつつじの花に彩られ、庚申尊天碑が導く江戸時代から続く参詣道の中を集う花見客の列が織りなす風情や、近代に育まれたつつじ園での花見の様子は、基山の初夏を彩る大興善寺の風情をつくり出している。

写真　つつじ園

写真　花見小屋

写真　花見小屋での宴の様子

❸まとめ

「大興善寺」への入り口である『元禄絵図』に描かれている参道を通り、大正元年架橋の村雲橋を渡る。その先にある長い石段を上がると、江戸時代中期の山門、明治時代移転の本堂に参り、小松の人々によって育てられたつつじ園を愛でることができる。「古刹(こさつ)をして現世の浄土(じょうど)にする」思いから始められた大興善寺のつつじ園は、年間3万人もの人々で賑わいを見せる。参道の賑わい、つつじ園での花見散策の人々、花見小屋での宴の様子に初夏の本町を彩るつつじまつりの歴史的風致を感じることができる。

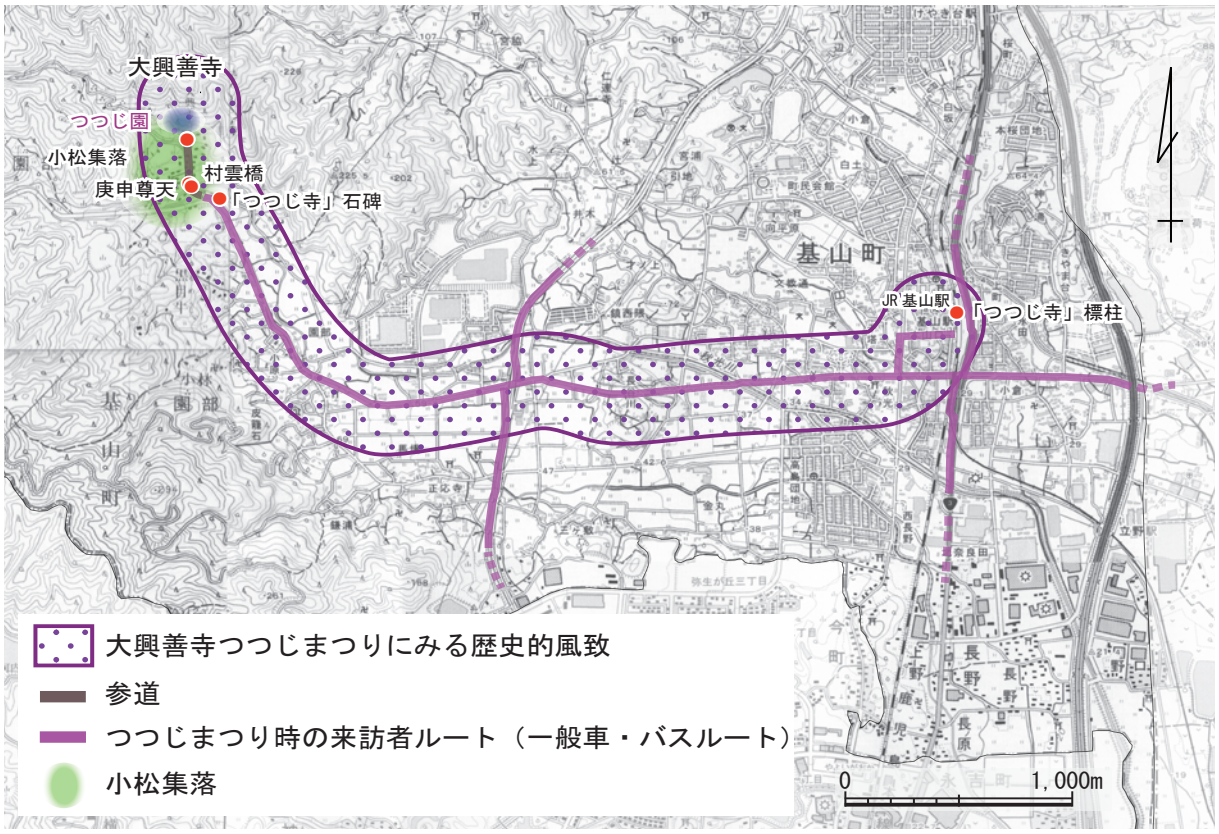


図　大興善寺つつじまつりにみる歴史的風致

【コラム】つつじに彩られる町並みとつつじの植栽運動

大興善寺つつじまつりへの道程や、町内の団地の街路樹として、そして民家につつじが植えられ、4月末から5月初旬には町内がつつじで彩られ華やかな初夏の風情をつくりだしている。

町内の昭和40年代に整備された高島団地やきやま台団地等にはつつじが植えられ、つつじの町基山を表現し、初夏の本町に彩りを添えている。その後に造成されたけやき台団地の多くの家々や駅、公園内にもつつじが植えられている。

写真　町中にあふれるつつじ

大正9年（1920）に住職の任に就いた神原玄祐師によって始められた大興善寺のつつじ園は、昭和前期には町の観光資源として近傍の市町に広がり、昭和30年（1955）頃に久留米ロータリークラブより「つつじ寺」の愛称が贈られる。今ではすっかり「つつじ寺　大興善寺」として知られるまでになった。

昭和53年(1978)に町民に投票を募り、64票中42票の多数でつつじが町の木に、昭和62年(1987)には同じく投票を募り、47票中33票をつつじが占め町の花に指定され今に至っている。

町を代表する植物に指定された後、昭和53年（1978）12月に町制施行40周年を記念し、町内の全家庭へ町木であるつつじの配布が行われ、町につつじを植える活動が開花する。この時を境にそれ以降は、町内の家々をはじめ、道路、JR基山駅前広場、役場、体育館、小中学校など様々な場所、場面でつつじの姿を見ることができるようになった。初夏にはつつじの花が各所に開花し、皐月（さつき）晴れのまぶしさとつつじの華やかさで、本町の初夏の到来を町の至るところで感じられるまでになってきている。

写真　町民によって手入れされるつつじ

【コラム】火除け行事

毎年5月の連休には、JR基山駅前から臨時バスも出て、町内外から多くの花見客が大興善寺を訪れる。町内の人々も、家族や友人と、あるいは行政区ごとに花見に訪れる。行政区によっては、一年の集落の火除けを祈願するため、大興善寺の茅葺き屋根の拝堂で執り行われる火除け行事に参加する。この火除け行事は、明治45年(1912)5月に記された『小松山霊地帳』に、本尊十一面観世音菩薩が承和元年(834)の火災の中でも焼け残ったとされることに由来を持ち、明治初期に時の住職であった玉岡誓恩師の頃、恩師が師と仰ぐ東明館の野田昌隆先生の創案で始められたと伝えられ(『玉岡誓恩師を讃う』)、御本尊の威神力にすがる町民の願いを聞き、一年の災いを祓いのけてくださる行事である。

今では自家用車での乗り合わせで参加する人々が多くなったが、午前9時台にJR基山駅を出発するつつじまつり臨時バスに乗り合わせて、大興善寺まで行くのが慣習であった。臨時バス停へ到着すると午前10時から行われる火除け行事に間に合うために、つつじまつり参詣者で賑わう参道を一早く抜け、江戸中期建築の仁王門をくぐり、火除け行事が行われる拝堂へ参集する。

午前10時になると、薄暗がりの本堂内陣では、火除け行事が始まる。護摩焚きの天井に到達するほどの激しい炎が立ち昇る中、住職による祈祷が行われる。拝堂では参集した人々が内陣で行われている祈祷の姿を神妙に拝み、時の過ぎるのを待つ。護摩焚きが終わると、住職、副住職のお二人による経文によるお祓いが執り行われ、拝堂に座す人々の肩を念仏とともにひと叩きする。その経文の重みを肩に感じつつ、人々は一年の災いが祓われるのを祈るのである。

お祓いの後、正座で痛くなった足をさすりながら、参拝者は花見へと向かう。この大興善寺のご本尊は、12年に一度の御開帳時にしか拝めないが、御本尊の脇士である木造多聞天・木造広目天像は本堂横の国寶殿で拝むことができる。この像は、平安時代末期の作とされ国指定の重要文化財となっている。

火除け行事が終わると、区内の人々の親睦をかねて、本堂背後にあるつつじ園へ入り花見が行われる。つつじ園の中には、花見客のための小屋が建てられ、満開のつつじを愛でながら花見の宴が催される。

写真　火除け行事

2）契山伝説にみる歴史的風致

❶契山伝説にみる歴史的風致に関わる建造物と町並み

ア）契山伝説にみる歴史的風致に関わる建造物

【契山の伝説】

本町は、脊振山系の東端にあたり、町域の西部から北部にかけて山並が連なっている。この山並の中で、ひときわ高い2つの山が西と東に聳えているが、西にあるのが大興善寺の背後にある契山（408m）、そしてこの頂から約2㎞東にあるのが基肄城跡が所在する基山(404.5m）である。この二つの山の間には、古くからの伝説があり、昭和13年（1938）に基山尋常高等小学校によって編纂された『基山郷土読本』に「契山」として残され、平成21年（2009）刊行の『基山町史下巻』に次のように採録されている。

> 契　山
>
> 木の山の瓊瓊杵尊から子供のように慈しまれ、農業の道を教えられた人々は、この神さまのおつれあいの女神様を探して、心ばかりのご恩返しをせねばならぬと考えました。
>
> 木の山の西の方に頂上のまん丸い山があります。この山のまた西の方には八谷八山が重なり合っていました。その最初の谷の大山祇命と申す神様がお住まいになっておられましたが、この神様のお姫様は非常にきれいな女神様で、桜の花や梅の花よりも美しゅうございましたから、木花咲耶姫と申しておりました。
>
> 人々はある時、木の山の神様に木花咲耶姫をお迎えあそばすようにと、おすすめ申し上げました。沢山の人々が毎日毎日熱心にお願い申上げた甲斐がありましてようやくお許しが出ました。
>
> そこで人々たちは喜び勇んで今度は八谷八山の最初の谷の大山祇命に願って、木の尊と木花咲耶姫のお二方の神様が御契の御儀式を挙げて下さるようになりました。
>
> そこで木の山と八谷八山の間にある頂上のまん丸い山の頂で、このお二人の神様が御契りの御儀式を挙げさせられました。人々は嬉しさのあまり手の舞い足の踏むところも知らず、幾日も幾日もお祝い申上げました。
>
> それで今でもこの山を「契の山」と申します。木の尊をお祀りしてある荒穂神社は、この契山の東谷にあり、木花咲耶姫をお祀り申上げた木花神社はこの山の西の谷の古屋敷にあります。（以下省略）
>
> 『基山町史下巻』平成21年（2009）

この物語に登場する木の尊としての瓊瓊杵尊と木花咲耶姫は、現在、基山町内の神社として、瓊瓊杵尊は宮浦の荒穂神社に、木花咲耶姫は古屋敷の山神社にその御祭神として、それぞれ契を交わす前の地に住民の手によって祀られている。さらに、契を交わした後は、二人の神々は基山に合祀されていたと伝えられ、その後、木花咲耶姫は契山に分祀された後、現在の大興善寺西側にある熊野神社にて祀られるようになった。

写真　契山と基山

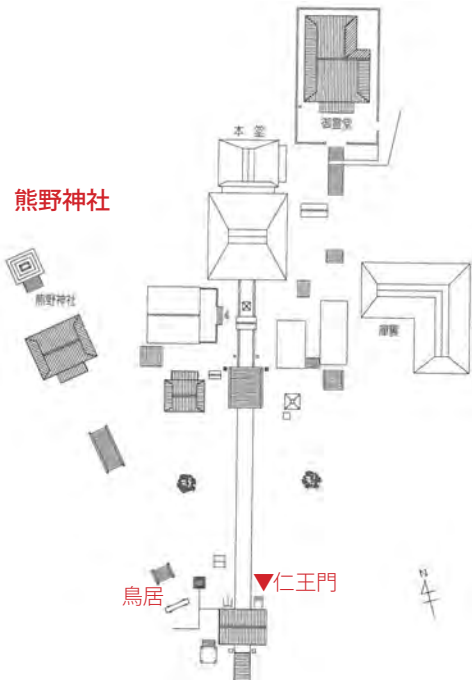
また、お二人の御子とされる彦火火出見尊（山幸彦）は、宮浦の荒穂神社南東に八龍天神社の御祭神として荒穂神社の御神幸祭に関わる仁蓮寺の人々によって祀られている。このように、古事記に登場する神々が、単に基山のむかし話として語られるだけでなく、神社の御祭神として地域に根差した祭祀が、今も執り行われている。

【タマタマ石と荒穂神社】

タマタマ石は、基山山頂にある花崗岩の巨石で、地元の高齢の人々からは「玉姫さま」と呼ばれている。この麓に位置する荒穂神社は、貞享２年（1685）に現在地に造られたが、当初は基山山頂に社殿がありタマタマ石を磐座（神が宿る聖なる巨石）として祀っていたと伝えられている。（詳細は54頁参照）

【熊野神社】

熊野神社の祭神である木花咲耶姫は、最初は基山山頂に瓊瓊杵尊と一緒に祀られていたが、後に契山に分祀し、龍蔵（立相）権現と称された。さらに、契山の麓である大興善寺境内の現在の鎮座地に遷向し、地元小松村の鎮守となったことが、正徳６年（1716）に作成された『基肄郡上郷神社記録』に記されている。明治初期には、社名を熊野神社と改めたが、氏子である小松集落の人々は、「ゴンゲンサン」と呼んでいる。この神社は、大興善寺への入り口にある仁王門のすぐ西隣に鳥居があり、宝永５年（1708）に作成された『肥前国基肄郡園部村寺社帳』に「大興善寺抱」と記載されていることから、元来は大興善寺と併設された一体的な神仏習合の施設であったことを窺うことができる。この鳥居を潜ると静寂な佇まいの参道が続き、さらに石段を登りきったところに背後が見通せる吹き抜けの拝殿がある。拝殿内には、明治22年の年号が見えることからこれ以前の建造であることが窺える。神殿は、この拝殿の背後に高い石段を設けた石の祠である。この石の祠は、高さ294㎝、幅160㎝という大きな花崗岩製のもので、正面には軒唐破風の下に威厳を感じる両開き石扉が付けられており、拝殿から参拝をする際には、吹き抜けの拝殿奥に厳かに神殿の祠を拝むことができるような構造としている。この祠の銘文には、「奉再建」「明治三十一戌年五月吉辰」「願主 小松産子中」「石工 渡邉三郎」と刻まれている。



資料　大興善寺境内にある熊野神社の配置
（出典『基山町史資料編』　一部改変）

写真　熊野神社の拝殿

写真　熊野神社の神殿

【八龍天神社】

元禄絵図にも記載された宮浦集落から城戸集落へ向う通称「ウソンタン（鷺の谷）越え」の分岐点に鎮座し、その周辺の仁蓮寺組合の人々により祀られている。祭神は、瓊瓊杵尊と木花咲耶姫との間に生まれたとされる彦火火出見尊（山幸彦）である。神殿には、天保14年（1843）に仁蓮寺の氏子により奉納されたものであることが記され、向拝（こうはい）部分に立派な軒唐破風が刻まれている。

写真　八龍天神社の祠

イ）契山伝説にみる歴史的風致に関わる町並み

【小松集落】

小松集落は、契山の麓に在る集落である。契山は、標高約408mで、福岡県と佐賀県の境目に延びる背振山脈の中にある。「契山」の伝説では、「まん丸い山」と表現され、そのやわらかな稜線と尾根で、麓の小松集落をやさしく抱いているように見える。この小松は、まとまった集落としては本町の最北西にあり、38軒の家々が、つつましく並んでいる。契山から延びる尾根や、田畑が境となって、他の集落とは隔てられ、また、新しい住人が入ってくることも滅多に無いため、ここ独自の様々な趣を持ち今に至っている。

写真　契山・大興善寺と小松集落の全景

契山から流れる清流は、集落内を大小縦横に延びる水路を絶え間なく流れ、小松の人々の生活を潤してきた。集落内を散策すると、至るところから聞こえる水のせせらぎの音が心地よい。契山の山壁は、台風などの強風から集落や田畑を守ってきた。また、かつては焚き物拾いの山、炭焼きの山でもあった。その昔、契山山頂に祀られていたゴンゲンサン（現在は大興善寺境内の熊野神社）は、今もなお集落の人々に祀り続けられ、その神の神幸の名残を現す石造物が集落内に残り、契山との深い縁を物語っている。朝夕、集落内にある大興善寺で打たれる鐘の音が山肌にこだまする。小松集落そして人々は、古より契山と共にあったことが分かる。

【仁蓮寺集落】

仁蓮寺集落は、契山から東へ伸びる丘陵の北側にあり、特別史跡基肄城跡がある基山（きざん）の南麓に位置する。潮井川と地元では呼称される実松川が集落の中を流れ、その両側に水田と農家住宅があり、本町の農村景観を見ることができる地域の一つである。また、特別史跡基肄城跡南水門へ通じる通称「ウソンタン越え」の道と、荒穂神社へ通じる道の分岐にもあたっており、基山東麓の丸林集落、城戸集落への連絡路として機能している。この「ウソンタン越え」の道沿いの農村景観の中に、八龍天神社の石製の祠が木々に囲まれて建っている。

写真　仁蓮寺集落の景観

図　契山伝説に関わる建造物と町並み

❷契山伝説に関わる人々の活動

ア）契山伝説に関わる神社で行われる信仰活動

木花咲耶姫を祀る熊野神社に関わる活動については、小松集落の氏子の人々により「お茶わかし」、「熊野神社・弁財天祭礼」が行われている。

【お茶わかし】

お茶わかしは、木花咲耶姫を祀る熊野神社の拝殿で毎月1日と15日に行われている行事である。

この行事を行うのは、小松集落に住む女性だけである。それも毎回全員が集まるのではない。組合名が書かれた順番木札があり、順番木札には、表に「熊野神社　朔日十五日　村方参詣可致候事」、裏には「堅固寺組　勝負谷組　西谷組　東組　中組　右之通り巡番相定メ候事　昭和十年四月」とあり、少なくとも昭和10年（1935）には輪番制により行われていた。（現在は堅固寺組はない。）

1日と15日の朝、大興善寺の副住職がおごくさ（本町では御仏飯のこと）をゴンゲンサンの神殿前に供える。赤い三宝に3～4合のご飯が円錐状に盛られたもので、箸も添えられている。天台宗の朝の習わしで、大興善寺では毎朝10カ所の仏様に御仏飯とお茶を供え、1日、15日はゴンゲンサンにも供える。

7時頃、当番組合の女性が集まってくる。冬は凍てつく寒さの中、夏は蝉しぐれの中、集落から真上に延びる急な階段を上ってくる。足が不自由な人は、大興善寺の駐車場まで車で来て、そこから本堂前を通ってゴンゲンサンの社殿まで歩く。誰もが一様に行うのが、大興善寺の本堂前で手を合わせ、ゴンゲンサンに歩みを進めることである。ゴンゲンサンの境内に入ると、朝日に照らされた神殿が拝殿の開放的な造りの後ろによく見える。参集した人々は、同じ組合でもなかなか会わないらしく「あら、ひさしぶり。」などと声を交わし拝殿に上がる。板敷きの上にゴザを敷き、先に供えられているおごくさの横に、それぞれが持ってきたオハチゴメ（お鉢米＝お寺の仏様に供えるお米）と賽銭を神殿前に供える。オハチゴメは、約2～3合のお米が布の巾着袋に入れてある。居住まいを正し、皆で神殿に向かって手を合わせてお参りをした後、各々持ってきたお茶やお菓子、漬物が配られ、ひとしきりそれらを頂きながら話が弾む。最後に、供えられたおごくさを皆で分けてその場で頂く。

オハチゴメとお賽銭は、大興善寺に持って行き、この行事は終わる。

約30分ほどの行事であるが、曜日に関係なく、朝の光を浴びながら、ゆったりと神様の前でお茶を頂くのはなんて豊かな時間であろうかと思う。

写真　熊野神社の神殿、拝殿

写真　神殿前に供えられたおごくさ

写真　お茶わかし順番の木札（裏）

写真　おごくさの横に供えられたオハチゴメ

写真　神前で楽しむお茶やお菓子

写真　おごくさを皆で分けて食べる

【熊野神社・弁財天祭礼】

ゴンゲンサンは、小松集落全軒で祀る集落の氏神様である。熊野神社・弁財天祭礼は、毎年10月に座が開かれ、選ばれた家にはゴンゲンサンの分霊が1年間安置される祭である。座元は、行政組合の単位ではなく５軒が1グループとなり、今年の5軒と来年の5軒の計10軒が座に臨む。必ず１軒から一人、それも男性が参加をしなくてはならない。男性がいない時は、親戚や近所から雇わねばならないと言う、厳しいものである。この10人で、10月17日に近い日曜日の前の週に御神体としめ縄を作る。座元の中の1軒は座坪と呼ばれ、そこが1年間ゴンゲンサンの宿となり、座敷の床の間に御神体を安置する。この座元に引き継がれている文書には、「佐賀県肥前國基肄郡園部村雑社　立相神社祭禮儀式帳　明和八年九月調　明治十九年九月改　小松中」とあり、明和8年（1771）以前から続けられていることが分かる。

10月の澄んだ空の下、10人の男性が座坪に集まり、しめ縄を作る。納屋に藁を広げて、藁を整え、まずはしめ縄の元となる「さしわら」を作る。年齢もバラバラで、初めて座に参加した人もいて、ベテラン年配者の教える声が飛び交い賑やかである。天井の梁からしめ縄の先端を吊るし、「若かもんに教えんば。まず藁を3つに分けて、三人でねじっていくとたい。」と年配者が三人で作りだした。それを若者たちが真剣な眼差しで見ている。皆で「せいの一、ほっ」と掛け声を掛けながら力を込めてねじり、ゴンゲンサンの鳥居に掛ける長いしめ縄などを作っていく。

他にも、御神体作りをする人、細い女竹を切り出して来て御幣と共に座坪の玄関前に立て、しめ縄を張る作業も同時に行われる。10時の休憩には、女性陣が用意した赤飯と甘酒をお腹に入れて、後の作業のために力を付ける。

一方、女性たちは、お昼の直会の料理の準備を行いながら、花米（はなよね）に付ける「紙縒（こよ）り」を作る。花米とは、毎年10月17日に近い日曜日に小松集落の全軒が、ゴンゲンサンのお堂に赴き、奉納する米（1軒当り2～3合）のことである。「紙縒（こよ）り」には、集落中の家の当主の名前が墨で書かれており、それを米の包みにつけ、誰が納めたのかが分かるようになっている。その朝には、座元で大きな餅を用意して（昔は餅を搗いていたが、今はお菓子屋に頼んでいる）ゴンゲンサンに供える。昼過ぎてから、餅を軒数分に切り分けて袋に入れ、盆に載せて「ゴンゲンサンのお餅です。」と言って一軒々々に配る。この餅は、それぞれの家で、家族で食べ、無病息災を願うという。この行事はいつから始まったかは不明であるが「大正拾弐年十月　花米取立帳　小松部落」に「大正拾二年十月九日　堅固寺組座元ノ際部落協議ノ結果花米取立帳を新設セリ但シ花米不納者ハ…」とあることから、大正12年（1923）以前から行われていたことが伺える。

写真　さしわらつくり

写真　しめ縄を綯う

写真　御神体と御幣をつくる

写真　必ずつくられる赤飯

写真　休憩時の甘酒

写真　花米につける紙縒り

しめ縄が出来ると、軽トラックの荷台に乗せてゴンゲンサンへと向かう。竹を立てた石製鳥居の両柱にしめ縄を張るのであるが、社殿に向かって左側のしめ縄の先を上に向け、右先端は下に向けて括るきまりがある。その下に御幣を立てて出来上がりである。

片付けも終え、座坪宅の座敷で神事が始まる。床の間には新旧の御神体が立てられ、その前に榊、お神酒、御仏飯、ろうそくに火が点される。大興善寺の住職が床の間の前に座り、お経が上げられる。その後直会が始められ、乾杯をし、御馳走に箸を付ける前に来年の座坪を決めるくじ引きが始まる。大興善寺住職が用意してきた、白い紙を小さく折り畳んだくじを盆に載せ、新座元の5人に回す。皆、ドキドキしながら開き、墨で丸印が付いたくじを引いた人が当りである。座坪を一年間勤めるのは大変らしく、外れた者が「急に酒の旨(うま)もうなった。」と言うと「くじ引く前は悲壮な顔をしとんなさったですもんね。」

写真　しめ縄が付いた熊野神社の鳥居

写真　鳥居にしめ縄を付ける

写真　新しい座坪の御神体

写真　神事にお経が上げられる

写真　直会での乾杯

と旧座元連中がからかう。急に賑やかになって直会が進む。クジが当たった新座坪はすぐに家に電話をし、その由を伝える。この直会の後、新座元宅に御神体を皆で持って行き、床の間に安置後お茶を飲むため、その用意を家人はして御神体の到着を待つ必要があるからである。

このように長い年月、小松集落の氏神として木花咲耶姫を御神体とするゴンゲンサンを祀り大切にして来た。それに加えて、神仏習合の習わしが今も続き、大興善寺がその一端を担い続けている。

【八龍天神社の御座（おざ）】

八龍天神社では、毎年1回、氏子である仁蓮寺集落の人々による「御座」と呼ばれる祭礼が行われている。仁蓮寺集落では30軒の世帯において輪番制で毎年3軒の座元が決められて、この座元の話し合いにより祭礼の日が決められる。祭礼は、座元たちで決められた日に、氏子たちが神殿にお参りをして、各世帯1名が昼食時に集落内にある仁蓮寺公民館に参集し、館内に八龍天神社の祭神である彦火火出見尊(山幸彦) の掛け軸をかけて直会が執り行われる。昭和13年生まれの氏子の話では、自分が子供の頃は、3軒の座元がそれぞれ料理を持ち寄って子供から大人までの氏子全員が参加して賑やかに行われていたと言う。

❸まとめ

先人達は、現代よりも自然に親しむとともに、神々を恐れ尊んできた。そして、自然と神々を結び付けて物語をつくり、いつしか伝説として子や孫に語り継いでいった。基山の先人たちは、特に大和朝廷により国家的事業として造られた基肄城、そしてこれが所在する基山（きざん）とこの山頂のタマタマ石を磐座とし、式内社としての由緒を持つ荒穂神社を特別な存在として親しみ敬いながら地域の山や神と一体的に結び付けていった。契山伝説は、このような人々の意識の中で育まれ、古事記の瓊瓊杵尊と木花咲耶姫の物語を原型とした伝説の中で親しみのある山を「契山」と名付けたのである。この伝説を通した大興善寺や山神社の氏子である古屋敷の人々、契山の麓の小松集落の人々の信仰活動及び全町的に広がった伝承活動に契山伝説にみる歴史的風致を見ることができる。

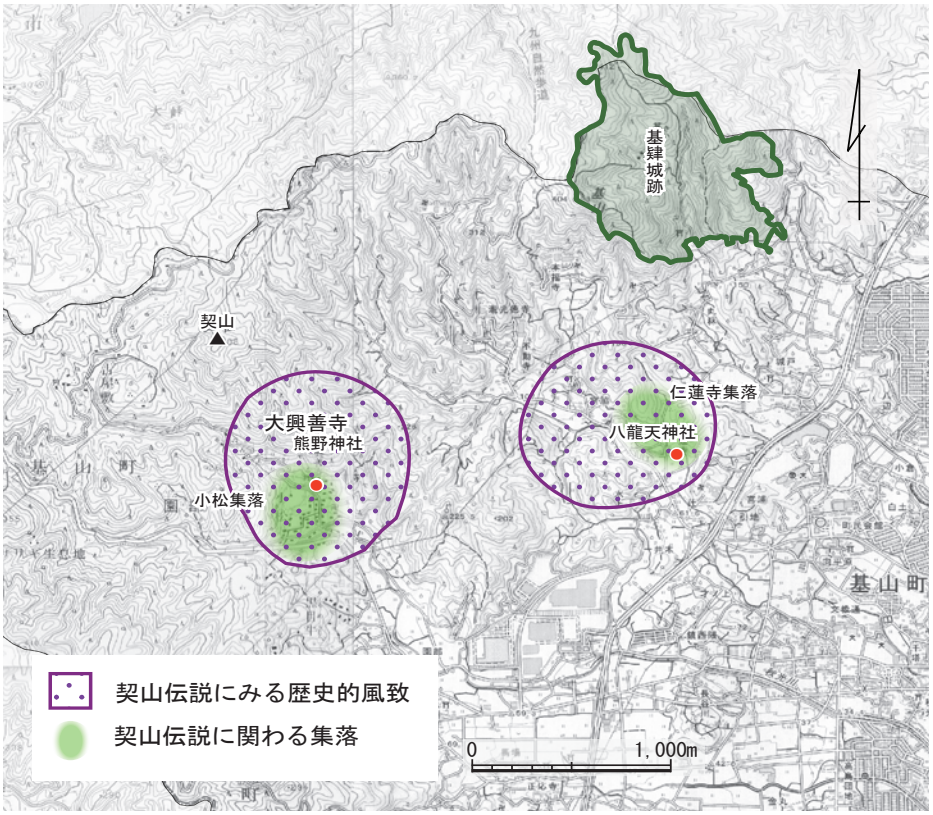


図　契山伝説にみる歴史的風致

(3) おわりに

大正９年(1920)に神原玄祐師の発起で大興善寺の全山をつつじ園に成すことを目的として始められたつつじ植栽に端緒をなすつつじの花は、初夏を感じさせるとともに、江戸中期建築の山門や明治期移設の護摩堂など歴史的建造物の古びた風情に華やかさを添える。町域に広がったつつじの育成活動により、特別史跡基肄城跡がある基山をはじめ、町全体に彩や華やかさが与えられ、玄祐師の「古刹をして現世の浄土にする」思いを町全体への広がりとして感じることができる。

また、郷土で代々語り継がれてきた契山伝説において、基肄城がある基山山頂に鎮座していた荒穂神社の神様と木花咲耶姫が契りを結んだことに因む建造物等が、舞台となった契山の周辺に今も人々の活動とともに存在する。なかでも大興善寺にある熊野神社では、昔ながらに寺と小松集落の氏子たちで一体的に信仰行事が執り行われている。さらに、町の貴重な文化遺産である契山伝説を残し、関連する建造物等を伝説とともに今後も伝えていこうとする人々の姿が見られる。

このように、大興善寺を核として、町全体に広がりをみせるつつじの花や、契山伝説にまつわる活動が、歴史的な建造物やまちなみと一体となり、町民の心に息づく歴史的風致を形成している。

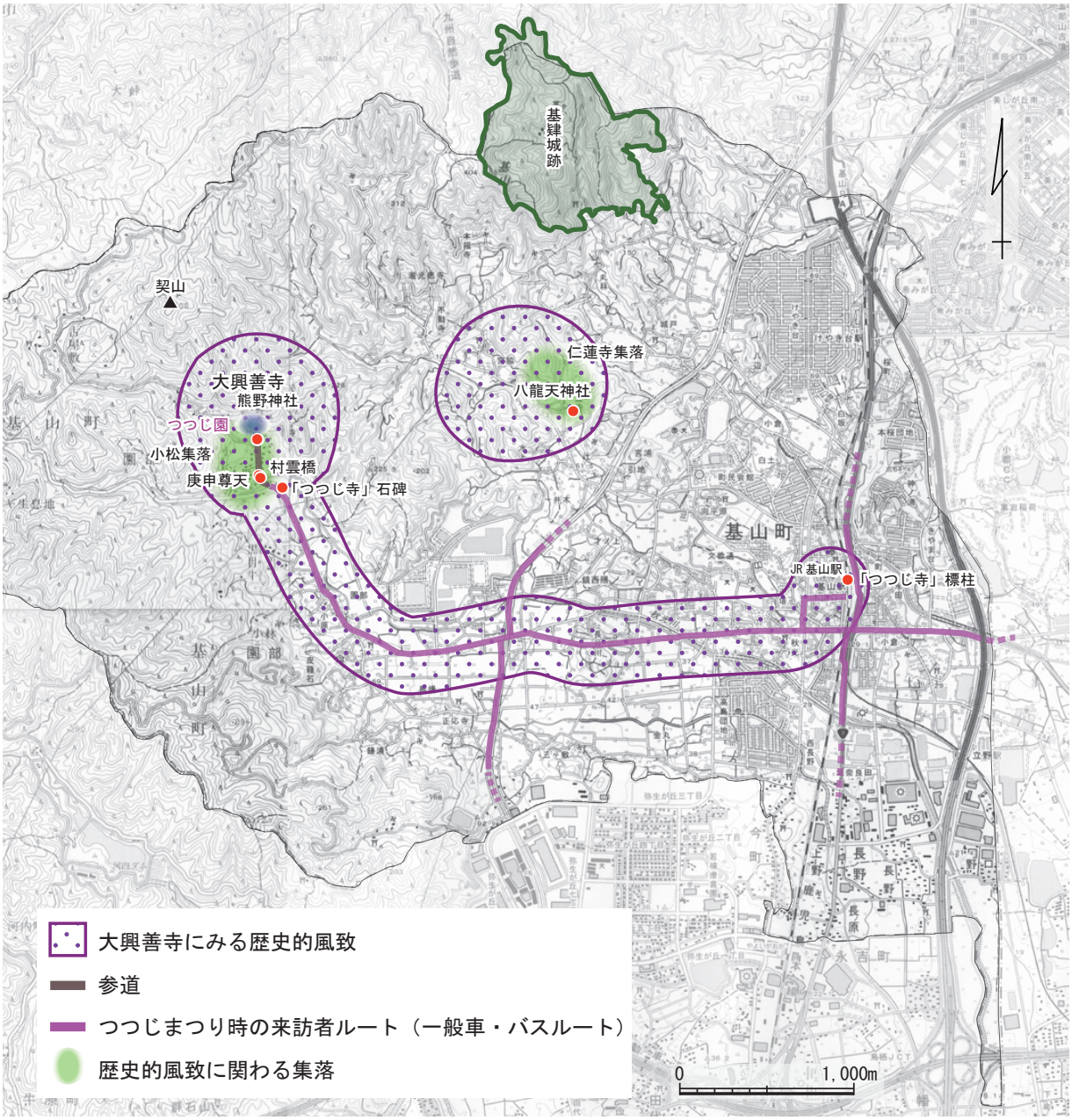


図　大興善寺にみる歴史的風致

【コラム】基山と大興善寺を繋ぐ道「きのくに古道」

古くから基山方面あるいは宮浦地区と大興善寺を繋ぐ道として、整備活用されてきた山道がある。山道の脇には明治25年（1892）3月建立の「右小松山観世音道」と刻まれた石碑が建立されている。

本町の小中学校で伝統的に行われてきた基山への遠足の帰りには、小松集落周辺の生徒のみ、この古道で帰るのが許されていた。

当時の道路としての名称は不明ではあるが、本町の山登りの会である基肄山歩会により、平成5年（1993）から基山から大興善寺を結ぶルートとして「きのくに古道」と名付けられて現在は登山・散策ルートとして親しまれている。基肄城水門跡や大興善寺には、来訪者が自由に持ち帰ることができるようにコース案内用のハイキングマップを納めたポストが同会により設置されている。

写真　きのくに古道石碑

図　きのくに古道の位置

写真　大興善寺に設置されている基肄山歩会ハイキングマップポスト

【コラム】契山伝説を伝える活動

本町に伝えられた伝説には、基山や荒穂神社に関するものが多いが、基山と東西に並び聳える契山にも郷土の先人たちは神秘性、物語性を感受し、親しみの中から生まれた伝説を語り継いできた。この語り継ぐ活動の記録としての嚆矢は、昭和13年（1938）に基山尋常高等小学校の訓導が調査のうえ執筆・編集した『基山郷土読本』である。このほかにも、町民個人として書き残したものや昭和61年（1968）に発行された『基山の民話』があるが、内容的にある程度まとまっているのが『基山郷土読本』であり、久保訓導が執筆した「基山の伝説」に契山の伝説である「契山」も収録されたほか、数々の伝説が記載されていた。しかし本格的な書籍としての装丁でなくガリ版刷りであった『基山郷土読本』は、数十年の間にこのほとんどが散逸してしまっていた。ところが平成16年度から着手した「基山町史編さん事業」の編さん委員会委員であり執筆者でもあった郷土史家の松隈嵩氏により1部だけ大切に保管されていたのが発見されたことにより、『基山町史下巻』に採録されて80年前に郷土の先人に伝わっていた伝説がほぼ変わることなく今に伝えられている。

平成24年（2012）には、つつじ寺として有名な大興善寺は、神様が契りを結んだ伝説に由来する「契山」の南麓に位置していることと、つつじの花言葉が「愛の喜び」であることを合わせて、NPO法人地域包括支援センターが展開する恋人たちの聖地プロジェクトに町民団体と本町の観光協会が申請した結果、プロポーズに相応しい名所「大興善寺 契山」として佐賀県で2番目に認定を受けた。これ以後、大興善寺は若者達が集うスポットとしても伝説を伝えている。

さらに、平成28年度には、基山町文化遺産活用推進実行委員会により、契山伝説を解り易く町内外に広めることを目的として『発見！きやまの歴史3 契山ものがたり』という絵本が刊行されるとともに、本町の観光協会では基山町散策コースの神話探索コースの一つとして「契山伝説の道コース」が設定され、一般住民へのコースマップの配布や基山駅前にコース看板を設置するなど、伝説をもとに散策を通した町民の健康増進や町外からの観光客にたいしても活用が図られた。平成29年度には「契山伝説の道」をテーマとして、基山町文化遺産ガイドボランティアにより調査研究が行われ、その成果を刊行物などを通して発信するなど、契山伝説を伝える活動が続けられている。

写真　「大興善寺 契山」のスポットとして建てられた契山観音堂

資料　神話探索コースのマップ

資料　契山伝説の道のマップ（基山町文化遺産ガイドボランティア作成）